HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Multidimensional Poverty in Nigeria: A Household-Level Analysis Focusing on Vulnerable Groups [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	OKOGUN, Oluwanishola Abiodun
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第16144号
Issue Date	2024-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93322
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Okogun_Oluwanishola_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：Okogun, Oluwanishola Abiodun

審査委員	主査	教授	髙木　真吾
	副査	准教授	高井　哲彦
	副査	准教授	樋渡　雅人（東京大学）

学位論文題名

Multidimensional Poverty in Nigeria: A Household-Level Analysis Focusing on Vulnerable Groups

（ナイジェリアにおける多次元貧困―脆弱層に焦点をあてた家計レベルの分析）

Okogun 氏の学位論文は，ナイジェリアにおける貧困の動態や開発政策の効果について，家計レベルの個票データを用いて，貧困の多面的な性格や女性や子供といった脆弱層に焦点をあてた実証分析を実施したものである。本論文は，国際査読誌に公刊された１編を含む５章構成からなる。各章の構成は以下の通りである。

第 1 章では，当論文の背景を述べたうえで，学術的な意義と全体の構成について示している。

第 2 章では，ナイジェリアにおける貧困と開発政策の社会経済的背景について検討している。貧困の歴史的な経緯，現在の状況，および政策対応を包括的に検討し，ナイジェリアにおける貧困削減停滞の背景について，経済変動，政治的不安定性，人口動態の変化といった観点を含めて論じている。また，これらの複雑さを理解するための研究課題を提示し，貧困削減と開発のための全体的かつ地域の文脈に応じた戦略の必要性を強調している。

第 3 章では，2003 年から 2018 年にかけてのナイジェリアにおける地域間の経済厚生を多次元の指標に基づき評価している。評価の手法として，1 次優越(First Order Dominance，以下 FOD)の概念を導入することで，各次元に対するウェイト付けを行うことなく，州ごとの総合的なランキングを算出し，2000 年代を通した貧困の動態を詳細に検討している。データとしては，2003 年，2008 年，2013 年，2018 年に実施された人口保健調査（DHS）のミクロデータを用い，特に女性と子供に焦点をおいた分析を実施している。結果として，北部と南部の貧困格差は持続

しているものの，地域内での貧困順位には大きな変動があったことを明らかにしている。また，FOD 順位の変動は所得支出ベースの貧困率の変動と比べて変化が遅いことなど見出している。さらに，子供と女性の貧困における独自の傾向が明らかされ，文化的差異や地域格差の影響が示唆されている。

第 4 章では，ナイジェリアの学校給食プログラム(School Feeding Program，以下 SFP)を扱い，5 歳から 12 歳の子供たちの教育および健康に対する効果を検証している。2018/2019 年に実施されたナイジェリア生活水準調査（NLSS）のミクロデータを用いて，SFP が学校出席率，病気発生率，教育および健康に関する家計支出に与える影響を推計している。結果として，SFP は学校出席率には正の効果をもたらし，特に北部地域で顕著な影響が見られた。しかし，子供の病気発生率への影響は明確ではなかった。また，SFP への参加は教育支出と負の効果をもたらす一方で，家計の健康支出との有意な関係は見られなかった。ここから，SFP が子供たちの学校出席を高める一方で，家族が教育支出を抑えることで教育効果が弱まる可能性を指摘している。本章では，これらの結果のより広範な意味について議論し，SFP の効果を最大化するためには，地域固有の戦略と親の関与が重要であることを強調している。

第 5 章では，前章までの成果を総合し，本研究の研究成果とその意義について包括的に議論している。

令和 6 年 7 月 25 日に，本学経済学研究院の髙木真吾，高井哲彦，及び東京大学大学院総合文化研究科の樋渡雅人による審査委員会を開催した。審査委員会の評価は以下の通りである。

当論文は，アフリカで最大の貧困人口を有するナイジェリアを対象に，貧困の動態や開発政策の効果を実証的に検証することで，様々な新しい事実発見を提示している。特に，ミクロデータを用いて，FOD を用いて各次元のウェイト付け無しの貧困の多次元指標を導出・活用したことや，学校給食の効果を計量経済学手法によって明らかにしたことは，ナイジェリアの貧困・開発研究として新しいだけでなく，同様の貧困の特徴や開発政策を有する多くの途上国に対する示唆を含んでおり，学術的・政策的意義が認められる。

一方で，当論文は，様々な点で改善の余地を残している。審査委員会では，分析結果は，貧困の動態や政策効果は地域による条件や文化の違いに依存することを示唆するものであったが，その地域的な背景により深く迫るような調査・考察には欠けている点，4 章の計量経済的な推計手法についてはさらなる精緻化が望まれる点など指摘された。ただし，これらは今後の課題として検討されるべき点であり，本論文の価値を損なうものではない。

以上をふまえ、当審査委員会は、Okogun 氏により提出された学位請求論文について、当論文がナイジェリアにおける貧困の問題を貧困の多面的性格や脆弱層に対する政策介入の観点から実証的に検証した一定水準を満たす研究成果であると評価し、全会一致をもって、博士（経済学）の学位を授与されるにふさわしいと判断した。